

本学幼児保育学科における実習指導の課題
—学生のコメントを手がかりとして—

杉原 徹*

**Issues of Guidance on Teaching Practices in Department of Early
Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College :
Focusing upon the Comment of Students**

Toru SUGIHARA*

Abstract: The purpose of this paper is to find issues of guidance on teaching practices in Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College. The students have to study five teaching practices in two years to get two qualifications, kindergarten teacher and nursery. The subject of this study was the students who finished all teaching practices. The author asked them the following question “*Which training gave you the strongest impressions?*” According to their answers, most of them seemed to feel great difficulties in teaching practice at a kindergarten and teaching practice at a social welfare institution. To reduce their difficulties in teaching practice at a kindergarten, for example, it is necessary to lay emphasis on prior guidance for second-year students and to teach them how to build a teaching plan in detail. And for training in a social welfare institution, it is very important to improve the guidance from the perspective of knowledge about institutions and of the lifestyle of the students.

Key Word: Guidance on Teaching Practices・Teaching Practice at a Kindergarten・Teaching Practice at a Social Welfare Institution

1. はじめに

保育者養成課程を持つ大学、短期大学、専門学校で実施される幼稚園、保育所、児童福祉施設などでの学外実習は、それぞれの養成課程の中でなぜ必要とされているのだろうか。こうした問いに対しては、さしあたり、幼稚園教諭免

許状や保育士資格取得のための必修科目ないし選択必修科目として位置づけられているから、と回答することができるだろうか。たしかに学外実習は必修科目ないし選択必修科目であり、これ以上の回答はないといえる^a。しかし、例えば、保育士養成校での単位取得とは別の保育士資格取得方法である保育士国家試験では、筆記

*〒780-0955 高知市旭天神町292-26

高知学園短期大学 幼児保育学科, E-mail: sugihara@kochi-gc.ac.jp

Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292-26 Asahi Tenjin-cho, Kochi 780-0955, Japan.

試験として「保育実習理論」という科目こそ用意されているものの、実際に保育所・施設に赴いての実習は必要要件とされていない¹⁾。ここであらためて、養成校では養成課程の中でなぜ学外実習をするのか、という問いが浮上してくる。

実習用テキスト（二階堂，2009）では学外実習の意義について3段階に分けながら具体的に述べられている。

「第一のステップは、児童がその施設や園でどのような生活をしているのか、教職員がどのような役割をもっているのか、施設はどのように機能しているのか、自らの五感で学んでいくことである。

第二のステップは、環境を通して、児童の利益になるために、自分はどうか援助し、どのようにかかわっていったらよいかを学内で学んだ理論と実践をあわせて学ぶことである。そして、保護者への支援の方法を学ぶことである。

第三に、そこから得られたことを通して、子ども観（子どもはどのような存在なのか）、発達観（発達するということはどういうことなのか）、保育（教育）観（発達を援助していくにはどのような保育や教育がいいのか）を確立させることに意義がある。まさに保育・教育の精神を会得することである。」

ここで「五感」を通した学び、「学内で学んだ理論」と「実践」をあわせた学びについて述べられるとともに、最終的な段階として「子ども

観」「保育（教育）観」の確立といったことが実習の意義として述べられている。学内での「理論」を学外実習での「実践」とあわせて学ぶという視点は保育者養成課程ならではのものであり、学外実習が保育者養成課程において極めて重要な位置にあることが読み取れる。

養成校は、学外実習を通して学生たちがこうしたステップを着実に踏めるよう実習施設と協力しながら指導・支援していかなければならない。それぞれのステップには正解が用意されているわけではないが、学生一人ひとりが実習を通してそれぞれの「子ども観」「保育（教育）観」を見いだしながら資格取得に到達できるように指導・支援が求められるだろう。

筆者は平成19年度4月に本学幼児保育学科に着任し実習担当者となった。上記のような指導・支援を目標に試行錯誤しながら実習指導を進めてはいるが力量不足を痛感している。それぞれの実習での必要事項に関する指導力の不足に加え、学生たちが本学の養成課程の中でそれぞれの実習をどのような思いで経験しているのかその実態把握も不十分だと感じている。実習担当者は学生の声をしっかり聞きながら実習指導を構想していかなければならない。

実習指導に関する先行研究を見ると、そのほとんどが幼稚園、保育所、施設それぞれの実習を個別に検討したものであり（卜田・植田，2003；中津ほか，2007；長谷，2005など）、幼稚

¹⁾「教育実習」は教育職員免許法で定められている幼稚園教諭免許状取得のための必修科目「教職に関する科目」のうちの5単位を構成し、学外実習が4単位、事前・事後指導が1単位として位置づけられている。なお、本稿において、教育実習、と表記しているものは学外実習4単位を指し示している。

「保育実習」は「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（平成15年12月19日付厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）における別紙2「保育実習基準」のうち必修科目5単位を構成している。このうち保育所における実習が2単位、保育所以外の施設（乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、知的障害者更生施設（入所）、知的障害者授産施設（入所）、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園）における実習が2単位、事前・事後指導が1単位として位置づけられている。この他に選択必修科目として「保育実習Ⅱ」（保育所での実習）「保育実習Ⅲ」（児童厚生施設又は知的障害児通園施設その他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの）がそれぞれ2単位として位置づけられている。

²⁾保育士国家試験は毎年8月に1次試験（筆記試験）、10月に2次試験（実技試験）が実施されている。現在の筆記試験科目は「社会福祉」「児童福祉」「発達心理学」「精神保健」「小児保健」「小児栄養」「保育原理」「教育原理」「養護原理」「保育実習理論」の10科目である。実技試験は「音楽」「絵画制作」「言語」3分野のうち2分野選択となっている。

園と保育所あるいは保育所と施設との関連の中で検討したものがわずかにあるだけである（三溝・松崎，2002；森山ほか，2007など）。養成校としてカリキュラムの中での実習計画の全体を考慮しながら実習指導内容について検討した研究は見当たらない。学生にとってみればすべての実習が段階的につながっているのであり、養成校が実習指導を改善していくためには実習の全体計画を考慮する視点が不可欠であると思われる。そこで本稿は、本学の保育者養成課程における実習計画の特徴を整理しつつ、その上で学生のコメントを手がかりとしながら実習指導の今後の課題を探ることを目的とする。

2. 本学の実習計画の特徴

本学では2年間の保育者養成課程の中で、幼稚園教諭二種免許状・保育士資格取得のための学外実習を以下のようなスケジュールで実施している。

- ・1年次9月（2週間）
保育実習Ⅰ（保育所）^c 2単位
- ・1年次2月（1週間）
幼稚園観察実習 1単位（「教育実習の研究」と連動）
- ・2年次6月（4週間）
教育実習 4単位
- ・2年次8～9月（10日間）
保育実習Ⅰ（施設）^d 2単位
- ・2年次11月（2週間）
保育実習Ⅱ 2単位

このように2年間で計5回、総計で約11週間、11単位分の学外実習を行っている。以下、本学の実習の特徴について簡単にまとめておく。

- (1) 保育実習について—保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱは原則同一保育所—

本学では保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱを原則同一保育所で実施している。つまり、本学の学生は学生生活最初と最後の実習を同じ保育所で行うということになる。本学では、保育実習全般について社団法人全国保育士養成協議会専門委員会作成の「保育実習指導のミニマムスタンダード」を参考にしているが、ここでは「保育実習Ⅰ（保育所）」と「保育実習Ⅱ」の考え方として、保育所での実習を通して実習生に学ばせる標準的な事項が4点あげられている。

- i) 「保育実習Ⅰ（保育所）」と「保育実習Ⅱ」の継続性を理解することができる項目であること
- ii) 「保育実習Ⅰ（保育所）」と「保育実習Ⅱ」の段階性を理解することができる項目であること
- iii) 学生が保育所実習全体を通して、子ども、家庭、地域への理解を深化できる項目であること
- iv) 保育所保育士としての職業倫理を涵養することのできる項目であること

ここにあげられた4項目のうち本学では「継続性」「段階性」という観点を重視し、原則同一保育所で実施している。ここでの「継続性」「段階性」が同一保育所での実習を義務づけているものではない。しかし、同一保育所で実施することで「継続性」「段階性」がより明確になるのではないか。実習園に対しては2年越しの2回の実習を最初の段階から依頼する。保育実習Ⅰ受け入れの段階で次年度の保育実習Ⅱの受け入れが前提となっている。そのことで、保育実習Ⅰ

^c 「保育実習Ⅰ（保育所）」は「保育実習」（実習・5単位）において習得することが定められた保育所における実習を指す。用語は「保育実習指導のミニマムスタンダード」（社団法人全国保育士養成協議会専門委員会編 平成17年9月28日発行）に基づいている。

^d 「保育実習Ⅰ（施設）」とは「保育実習」（実習・5単位）において2単位を習得することが定められた居住型児童福祉施設等（注釈a参照）における実習を指す。用語は「保育実習Ⅰ（保育所）」同様、「保育実習指導のミニマムスタンダード」に基づいている。

では保育実習Ⅱにつながるような指導をお願いすることが可能となる。

(2) 教育実習について—幼稚園観察実習との連動性—

本学では2年次6月の教育実習の事前指導科目「教育実習の研究」を1年次後期に開講し、この教科と連動させる形で1年次2月に1週間の幼稚園観察実習を実施している。観察実習の実習園は高知市内の幼稚園を中心としているが、その際、教育実習における実習園となるべく同じになるようにしている⁶。附属幼稚園を持つ保育者養成校では、観察実習をすべて附属幼稚園で実施しているケースも少なくないが、本学では教育実習への接続を考慮し、観察実習と教育実習が同一園となるように心がけている⁷。

3. アンケート調査

このように計画された本学の学外実習のそれぞれを学生自身はどのように経験しているのか。卒業前の学生のコメントを手がかりとしてその一端を探ってみたい（なお、以下では「保育実習Ⅰ（施設）」について、正式な科目名ではなく、多くの養成校で用いられている名称としての「施設実習」として記述することにする）。

平成19・20年度2年生うち後期に開講される保育原理Ⅱ（保育士資格取得のための選択必修科目）受講生に対してアンケートを実施した。「幼児保育学科2年生へのアンケート～学短での2年間を振り返って～」というタイトルで、以下の項目について質問し、自由記述形式でコメ

ントしてもらった。

問1「学短での2年間を通して、あなたが得たことは何ですか？授業関係、友人関係、その他どんなことでもかまいません（できるだけ具体的に）。」

問2「学短での2年間を通して大学側に不満を感じたことはありませんでしたか？」

問3「学短での2年間を通して5回の実習がありました。あなたにとって最も印象に残っている実習は何ですか？」

問4「みなさんは4月から新しい環境の中での生活になります。仕事面で期待していること、不安に思っていることなどを述べてください。」

4. 学生のコメントとその考察

問3について回答結果をまとめてみる。

回答数136

(19年度2年生60人 20年度2年生76人)

教育実習54人

(19年度2年生22人 20年度2年生32人)

施設実習37人

(19年度2年生14人 20年度2年生23人)

保育実習Ⅱ31人

(19年度2年生16人 20年度2年生15人)

保育実習Ⅰ（保育所）3人

(19年度2年生1人 20年度2年生2人)

その他11人

(19年度2年生7人 20年度2年生4人)

⁶本学では平成18年度入学生より現在のカリキュラムで保育実習を実施している。保育実習Ⅰ・Ⅱのねらいについて各実習園にはおおむねご理解いただいていると認識している。学生時代に1つの保育所ではなく、いろいろな保育所での実習を経験した方がいいのではないか、という意見をいただくこともあるが、毎年保育実習Ⅱ終了後に開催している保育所実習懇談会（実習園関係者、幼児保育学科スタッフが参加）等を通して本学の方針をご理解いただいている。

⁷本学では実習園への依頼の順番としては基本的に教育実習が先で、観察実習はその後もしくは教育実習と同時期である。

⁸平成20年度教育実習は高知市内18園（48人）、高知市外18園（33人）で実施しているが、高知市内18園と高知市外3園では同じ実習生を平成19年度観察実習でも受け入れていただいている。高知市外15園の実習生については附属幼稚園にて観察実習を行った。

この回答をみると教育実習、施設実習、保育実習Ⅱのいずれかをあげた学生が136人中122人に及び大多数を占めていることがわかる。「その他」の回答もこの3つの実習のうち複数に回答したものとなっている（教育実習・保育実習Ⅱが6人、教育実習・施設実習が4人、施設実習・保育実習Ⅱが1人）。この3つの実習が学生に強い印象を残しているようだ。以下、教育実習、施設実習、保育実習Ⅱの順番で学生のコメントの概要をまとめ、その上で主要コメントを取り上げ、コメント内容を考察してみる。

(1) 教育実習

<学生のコメントの概要>

「その他」の回答を含めると64人が教育実習をあげているが、例外なく1ヶ月（4週間）という期間についてコメントしている。1ヶ月（4週間）の実習をどのように感じているかは次の3つに分類でき、内訳は以下の通りである。

- (a)「辛かった（否定的）」14人
- (b)「充実していた（肯定的）」12人
- (c)「辛かったが充実していた（否定的<肯定的）」38人

(a) (c)における「辛かった」（52人）理由は、「1ヶ月（4週間）という期間の長さ自体」、「部分実習・1日実習とそれに伴う指導案作成」に関するコメントに二分でき、それぞれ38人、14人の内訳だった。

(b) (c)における「充実していた」（50人）理由は、「自分の成長を感じた」、「子どもとの関わりが深まった」に関するコメントに二分でき、それぞれ37人、25人の内訳だった（複数回答12人）。

<学生の主要コメント>

- ① 1ヶ月と長く辛かった。
- ② 初めての部分実習や1日実習があり大変だった。

- ③ 指導案や細案を書くのが大変だった。
- ④ 何回も指導案を書き直して持って行くのが嫌だった。
- ⑤ 指導案を書くのにものすごく時間がかかってしまって眠れなかったのが一番辛かった。しかし、大変だった分一番勉強になった。
- ⑥ 一番辛かったけど、一番充実していた。厳しかったけど、次に成長していくための反省点、改善点など学んだことがたくさんあり、充実した日々だった。
- ⑦ 大変なことがたくさんあったが、人間的に一回り成長できたのではないかと思える実習だった。
- ⑧ 1ヶ月も一緒にいたら子どもたちと別れるのがとても辛かった。
- ⑨ 最終日に子どもたちと離れるのがさみしく号泣してしまった。
- ⑩ 日々苦しめられた日誌や指導案からは早く解放されて大学に戻りたかったが、子どもたちとは1ヶ月間を通してとても仲良くなったのもっと続けたいという思いもあり、複雑な心境だった。

<考察>

「教育実習」と回答している学生のコメントには例外なく実習期間のことがあげられている。たしかに他の実習は長くても2週間であるのに対し、教育実習期間はその倍にあたる。この長い期間のうちに学生は部分実習や1日実習^hを経験し、幼稚園教諭として求められる指導力を身につけなければならない。①②のようなコメントが見られるのはもったもなことである。

また、③④のようなコメントも教育実習までの実習経験では致し方ないといえる。1年次の保育実習で指導案を書いて部分実習を体験する学生はごくわずかであるし、また1日実習については例外なく初体験である。指導案を立てる段階から苦勞し、それを実践するにあたっても

^h「部分実習」「1日実習」の定義は必ずしも一様でない。本学で学生に説明している「部分実習」とは、ある一定時間帯を実習生が任されて保育を行うことであり、原則指導案作成を必要とするものを指す。「1日実習」とは、1日を実習生が任されて保育をすることであり指導案作成を必要とするものを指す。

幼児の姿を把握できていなかったり、全体を見ることができなかつたりと思うようにいかず実習中辛い思いをする学生が少なくない。

しかし、辛さはむしろ充実感として記憶されているようでもある。⑥⑦のコメントでは、辛さが充実感へと変換されている。また、⑧⑨⑩のコメントを見ると教育実習における充実感の中身には子どもたちとの関係性にも起因していることがうかがえる。高橋（2000）でも紹介されているように、1ヶ月間子どもたちと共に幼稚園で生活する中で、これまでに経験したことがないほどの信頼関係というものを実感する学生もいるのだ。「保育者の仕事は子どもが好きでいいだけではない」という決まり文句がある。筆者は個人的にもこの文句を学生に対して使うことがある。しかし、「子どもが好き」という思いが消え失せては保育者の仕事が務まるはずもない。実習を通して育まれる学生のこうした思いを養成校として大事にしていかなければならない。

(2) 施設実習

＜学生のコメントの概要＞

「その他」の回答を含めると42人が施設実習をあげている。内容をみると次の4つに分類でき、内訳は以下の通りである。

- (a) 「辛かった（否定的）」22人
- (b) 「充実していた（肯定的）」12人
- (c) 「辛かったが充実していた（否定的＜肯定的）」4人
- (d) 「印象に残った」（辛さや充実については特にふれていないコメント）4人

(a) (c) における「辛かった」（26人）理由は、「宿泊実習」、「施設の特徴」「施設の利用者（子ども）との関わり」に関するコメントに三分類でき、内訳はそれぞれ16人、6人、6人であった（「施設の特徴」「施設の利用者（子ども）との関わり」への複数回答が2人）。

(b) (c) における「充実していた」（16人）理由は、「施設・施設保育士の役割」、「施設の利用者（子ども）との関わり」に関するコメントに二分

でき、それぞれ10人、8人の内訳であった（複数回答2人）。

(d) 「印象に残った」（4人）理由は、「実習生同士の支え合い」、「施設・施設の子どもへの思い」に関するコメントに二分でき、2人ずつであった。

＜学生の主要コメント＞

- ① 10日間の泊まり込みの実習でとても大変で精神的にきつかった。
- ② 宿泊実習を通して他の実習生と支え合ったことが印象に残っている。
- ③ 2～18歳という幅広い年齢の子どもたちとともに生活をする中で、それぞれの事情を抱えた子どもたちとどう接したらいいかわからず戸惑いの多い実習でした。
- ④ 児童養護施設を見たのも初めてだったし、その子どもたちと関わったのも初めてだった。何もかも初めてで戸惑いも大きかったので一番印象に残っている。
- ⑤ 私が担当した子どもの中にADHDの子どもがいて授業だけではわからなかった障害の子どもについて学びました。また、担当してはいない子どもでしたが、虐待を受けギブスをはめている子どもがいて身近なところで虐待が起こっていることに驚き、そして保育者を含む周囲の人が虐待に気づき、ケアしていく大切さを学びました。
- ⑥ 初めて乳児のおむつ交換をし、ミルクを飲ませ、0歳児でも首の座っていない子どもを抱いたりして感動したし、育児支援として保育士が母親（家族）への援助をしている姿をたくさん見ることができて良かった。
- ⑦ 幼稚園や保育所と全く雰囲気が違っていた。親と子どもが面会している様子も見ることができたし、またその機会が多かったので驚いた。
- ⑧ 知的障害者更生施設での実習で利用者が全員成人だった。利用者さんの楽しそうな様子や先生方からの指導により障害者への見方が変わり、心に残る実習だった。
- ⑨ 今まで子どもの指導者という経験しかなかつ

たが、初めて障害者に加えて大人を相手にする施設だったので余計に思い出があり、良い経験になっている。

- ⑩ 怖い、気持ち悪いという偏見が心の奥にあったが、実習に行き関わることによりすごく一生懸命生きていて輝いて見えた。自分の考え方が180度変わった。
- ⑪ 自分がいかに幸せであるのかをあらためて実感した。いろいろと考えさせられる実習だった。
- ⑫ 施設の子どもたちとふれあって子どもが愛しくなった。助けたい、力になりたいと思った。この子たちのために何かしたい！と強く思ったのは施設実習が一番だった。

<考察>

施設実習は幼稚園と保育所での実習と比較して実習形態が大きく異なるのが特徴である。児童養護施設での実習を中心に宿泊での実習が半数を占める¹。実際、施設実習についての学生のコメントには宿泊のことが多い。①などは宿泊での実習を経験した学生の典型的なコメントである。施設の性質上、泊まり込みの実習形態は当然のことであるが、学生にとっては落ち着ける我が家に帰宅できないことは大きな負担だったのかもしれない。施設実習における宿泊実習が実習生の大きな負担となることは村松（2009）が報告しているが、本学でも同様な傾向が明らかである。しかし、一方でコメント②にあるようにその分実習生同士の連帯感が生まれるというケースもあるようだ。

児童養護施設の特徴を把握しながら、児童と関わりを持つことに苦労した学生も複数見られ

る。例えば、児童養護施設では③④のようなコメントが見受けられる。学内で福祉関連の授業や実習事前指導を受けてはいるものの実際の施設の中で生活することは初めてであり、戸惑った様子がうかがえる。

一方で、コメント⑤⑥⑦にあるように実習を通して児童養護施設・乳児院を取り巻く諸問題、支援・援助の重要性について肌で感じ取った学生もいる。原（2009）によれば、児童養護施設や乳児院での実習の学習のポイントとして「子どもの状況、特に家庭環境を与えている影響を十分に把握し、それに対する支援がどのように行われているかについて理解する」「子どもや家庭に対する支援を考える際に、各スタッフがどのようにして連携しているかを把握するとともに、そこでの保育士の役割について理解する」ことがあげられる。学習のポイントに迫る⑤⑥⑦のようなコメントは極めて重要である。

また、知的障害者更生施設で実習を行った学生は、⑧⑨⑩にあるように成人である障害者の方と関わることで視野を広くしているようだ。入所者との関わりの中で障害を持っていても自分たちと何ら変わることがないと実感し充実した施設実習となる可能性が高いという報告がある（小倉ほか，2009）が、本学でもそうした例を見いだすことができる。

児童養護施設に実習に行った学生の⑪⑫のようなコメントも重要だろう。児童虐待件数が増加をたどり近年ますます児童養護施設の役割が期待されるようになってきている²。そうした中で保育者養成課程における施設実習の意義もこれまで以上に大きくなっている。学生の声を養成校がしっかりと受け止めていかなければならない。

¹ 平成20年度施設実習先の種別は児童養護施設8件、乳児院1件、肢体不自由児施設1件、知的障害者更生施設3件、母子生活支援施設1件であった。そのうち宿泊形態の実習が児童養護施設5件で、実習生は83人中42人を占める。

² 厚生労働省の報告によると平成20年度に全国の児童相談所に対応した児童虐待相談件数は速報値で42,662件である。例えば平成10年度が6,932件であったことを鑑みるとその増加数の著しさに驚かされる。こうした背景を受け、近年の児童養護施設における入所理由として「虐待」が多数を占めるようになってきている。厚生労働省雇用均等・児童家庭局がまとめた「児童養護施設入所児童等調査結果（平成20年2月1日現在）」によると児童養護施設入所児童の「養護問題発生理由」として「虐待」は全体の33.1%を占め、平成15年2月の前回調査27.4%と比較して増加傾向にある。詳しいデータは厚生労働省ホームページからダウンロードできる。

(<http://www.mhlm.go.jp/>)

(3) 保育実習Ⅱ

<学生のコメントの概要>

「その他」の回答を含めると38人が保育実習Ⅱをあげている。内容を見ると「充実していた(肯定的)」と「辛かった(否定的)」に二分でき、「充実していた」は35人、「辛かった」は3人であった。

「充実していた」理由は、「去年と同じ実習先」、「学生生活最後の実習」に関するコメントに二分でき、内訳はそれぞれ25人、19人であった(複数回答9人)。

「辛かった」理由は3人すべて「2週間という期間に部分実習・1日実習があったこと」に関するコメントであった。

<学生の主要コメント>

- ① 2年間通して同じ園に行ったことで子どもたちのすさまじい成長が見えた。
- ② 一度実習をした保育園というのもあり、子どもたちが覚えてくれていたことで実習しやすかった。
- ③ 今回の担当が1年の時受け持った子どもたちだったので思い入れが違いました。
- ④ 先生に1年前とかなり変わったと褒めてもらえてうれしかった。
- ⑤ 学生時代最後の実習であり、今までの授業や実習で学んだことを生かすことができ、自分に何が足りないのか、必要なのかを知ることができてとても良い実習になった。
- ⑥ 2年間で習ってきたことが生かされ、積極的に取り組むことができた。
- ⑦ 今までの実習では楽しいという気持ちより大変だったという思いがありますが、5回目には少し余裕も出てきて本当に楽しかったです。
- ⑧ 一番楽しくできて、毎日保育所に行きたいという気持ちが出てきました。本当に保育士になりたいと感じることができました。
- ⑨ ずっと保育者になろうかどうか迷っていたが、最後の保育所実習をしてみて保育の道へ進もうと決心することができた。

<考察>

「保育実習Ⅱ」は、同じ保育所での二度目の実習ということで、その点に関わるコメント、しかも①②③のような肯定的なコメントが多く見られる。乳幼児期の子どもたちは1年間で目覚ましく発達する。学生は同じ保育所で年をまたいで2回実習をすることで、同じ子どもが1年間でこれほどまでに成長するのかと実感できる。こうしたことは学生にとって「保育実習指導のミニマムスタンダード」における保育実習Ⅰ(保育所)と保育実習Ⅱの「継続性」の理解につながるだろう。

ところで、1年次の保育実習Ⅰといえば短大入学後初めての实習である。子どもへの言葉かけや日誌の書き方等で苦戦する学生がほとんどである。果たして自分は保育者に向いているだろうかと少々自信喪失気味の学生も、この実習での課題を抱えながら、1年次後期から1年間さまざまな授業を受け、また幼稚園、施設での学外実習も経験する中で保育者としての力量を身につけていく。そして学生生活最後の実習として学生生活最初の実習先にもう一度出かけていく。⑤⑥⑦のコメントにあるように、1年前と比較して成長した自分の姿を見いだす学生も少なくないのだろう。

また、⑧⑨のコメントのように養成課程最後の実習を通して成長した自分の姿を実感する中で、職業意識を明確にする学生も見られる。高知県の保育専門職への求人は例年11月後半から本格化する。最後の実習で保育の道への意識を高めた学生たちは、実習後に積極的に就職活動を進めることができると考えられる。

平成20年度卒業生の進路状況をみると、卒業生81人中就職希望者が80人、進学準備が1人で、年度末時点で就職希望者の就職率は100%である。内訳は幼稚園教諭6人、保育所保育士64人、施設保育士・院内保育士2人、認定こども園3人、公務員(保育職を除く)・一般企業等5人で、保育職を選択した学生は75人に及び全体の9割以上を占める。そのうち保育所就職者数が圧倒的多数になるのは、県内の保育所数、保育所保育士求人数の多さからして当然のこと

ではあるが、最後の実習が保育所であることも大きく影響しているという実感がある。

5. 今後の課題

教育実習、保育実習Ⅱ、施設実習における学生の声を拾い上げてきた。その声を受け止めながら今後の事前指導を構想していく必要がある。学生のコメントでは教育実習、施設実習での苦労を述べた内容が多く見られたので、ここでは教育実習、施設実習事前指導に焦点を当て今後の課題をあげておきたい。

(1) 教育実習事前指導の課題

教育実習事前指導を改善していくためには、教育実習の実施時期というものを考慮する必要がある。学生のコメントにもあるように、この実習は4週間と長くそのこと自体が大きな苦労である。しかし、期間は定められたものである。養成校としては教育実習で求められる内容面に配慮しなければならない。学生のコメントに「初めての部分実習や1日実習があり大変だった」とあった。初めて体験する部分実習や1日実習を乗り越えていくための準備を事前指導として考えていかなければならない。

本学では教育実習の事前指導科目として「教育実習の研究」が用意されている。ここで来たる教育実習に向けて、部分実習や1日実習の準備をする。具体的には幼稚園の1日の生活の流れを確認したり、視聴覚教材等を用いて部分実習や1日実習とは実習の中でどのように位置づけられ、どのような流れの中で実施されるものかということを確認したりする。指導案を作成する演習も取り入れる。

しかしながら、「教育実習の研究」に近接して行う実習はひとまず観察実習である。観察実習で必要となる幼児を観察するためのポイント、幼児の活動に対してそれを考察していく着眼点

等の指導も行わなければならない。それらは部分実習、1日実習を行う上での重要な基礎的学習となるわけだが、少なくとも指導案を立てるという段階まで指導していくには時間的に厳しい状況にある。

「教育実習の研究」において指導案の学習が困難なのは時間的制約のためだけではない。学生は観察実習を通して幼稚園の1日の流れや活動内容を観察し体験する。ここでようやく自らが教師となって部分実習や1日実習としてどのようなことをやっていくことになるのかをイメージすることができる。観察実習を経ることで部分実習や1日実習のイメージが少しずつできあがってくるのである。そのイメージは自分が指導案を作成し実践していくための基礎となる。逆にいえばその基礎すらない状態では指導計画といっても学生にとっては漠然としたものになる。そうしたことを考えていくと指導案の学習がより効果的になってくるのは観察実習後、本学のカリキュラムにそっていけば2年次4～5月にかけての時期といえよう。この時期、どのような指導を行っていくかが本学における教育実習事前指導の大きな課題である[Ⓝ]。

(2) 施設実習事前指導の課題

実習テキスト（田中，2009）に施設実習について次のようなことが述べられている。

「施設での実習には、みなさんの多くが不安をもっておられるのではないのでしょうか。幼稚園や保育所での実習に不安がないわけではない。でも、幼稚園や保育所は自分も通った経験があったりして、とにかく知っているような気がします。不安についても、ピアノを練習しておかなくちゃ、総合実習がちゃんとできるだろうか、とその内容も具体的です。そこへいくと、施設実習に対する不安は漠然としています。この「漠然として」いるところが施設実習に対する不安の一番の特徴です。」

[Ⓝ]2年次4～5月にかけての教育実習事前指導として平成20年度より附属幼稚園と連携した研究保育の取り組みを行っている。

本学の学生のコメントからうかがえる「戸惑い」も、実習前のこの「漠然として」いる不安の感覚に起因するところだろう。「戸惑い」を少しでも軽減できるような実習指導を考えるためには、学生の漠然たる不安を、具体性のある不安、事前対策できるような不安へと変換させる回路を設けてやる必要があるだろう。

先のテキストでは、続けて以下のようなことが書いてある。

「施設実習への不安は、何もせず軽くなることはありません。まず自分が実習に行く施設について知ることが、遠いようで一番の近道です。実習事前指導の授業に出席することはもちろん、「児童福祉」や「養護原理」などで学んだことを復習することも必要です。」

不安を軽減するための方策として「実習施設について知ること」、「実習事前指導の授業に出席すること」、「福祉関連科目の復習」があげられている。これらのことを本学の状況と照らし合わせながら考えてみる。施設の種別については福祉関連科目で学習している。それを前提として各学生が実習する施設の特徴については資料を作成・配布し、実習事前指導の授業の中で把握させている。また、過去の実習生の実習日誌を閲覧させ、実習のイメージを持たせている。ただし、福祉関連科目の担当者の実習指導担当者は異なっており、現時点では学習内容の連携については不十分といわざるをえない。福祉関連科目と実習指導内容が有機的に結びつくような体制を整えることが課題のひとつといえよう。

それと同時に実習事前指導の時間確保の問題もある。施設実習はカリキュラム上保育実習Ⅰに区分され、その事前指導として「保育実習の研究」が用意されている。しかしながら本学のカリキュラムでは保育実習Ⅰ（保育所）が1年次9月、保育実習Ⅰ（施設）が2年次8～9月となっており、1年次前期に開講される「保育実習の研究」は実質保育所実習向けの指導となっている。養成校に入学したばかりの学生を初めての実習に出すためには膨大な準備が必要であり、2年次の施設実習まで見通した指導には到底行き届かない。そこで、2年次にあらためて

事前指導が必要となるが、2年次には6月に教育実習が控えていることから4～5月はこれに向けた指導が中心とならざるをえない。施設実習事前指導については、現時点では教育実習を終えた7月に集中的に実施しているという状況である。このように、施設実習については事前指導時間の確保という課題も本学は抱えている。

では、「10日間の泊まり込みの実習でとても大変で精神的にきつかった」という多くの学生に見られるコメントについてはどのように受け止めるべきだろうか。原（2009）では以下のように述べられている。

「この「施設実習」の特徴は、利用者が入所して、生活している「生活の場」で実習させていただくことになる。誰も、自分の家へ他人が無遠慮にずかずかと入りこんでくれば、決してよい気持ちはしない。他人の「生活の場」へお伺いし、かかわる際に、どのような配慮が必要なのかをしっかりと検討した上で、実習に臨まなければならない。

同時に、施設に宿泊して実習を行う場合には、自分自身がすべての「生活」を運営する必要があり、その能力が問われることにもなる。利用者や自分自身を通して、「生活する」こととはどのようなことなのか、再度見つめ直すきっかけとすることが大切であろう。」

ここでは、施設実習のキーワードとしての「生活」について述べられている。利用者（児童）にとっての「生活の場」としての施設、しかも「生活の場」は幼稚園や保育所とは異なり24時間を過ごすいわば家としての「生活の場」である。そこに実習として入っていくのが施設実習である。宿泊となれば普段の我が家のようにはいかない。好きなときにテレビを見たり、携帯電話を使って友人と話をしたりメールをしたり、コンビニで買い物をしたり飲食したりすることに慣れきっている彼らの世代にとって、施設実習は生活リズムの相違に直面し、「生活」ということの意味を問い正される機会となる（長谷，2005）。

「生活」という問題は単に大学の授業そのもので学ぶものではなく、各授業で遅刻・欠席をしない、課題の提出期限を守るなど大学生活全

般を通して学んでいくものだろう。養成校としてはこうしたことをチェック・徹底させていくことで学生自身の「生活」の問い正しの契機とできるのではないだろうか。

6. まとめ

学生のコメントを手がかりにしながら、本学の実習指導上の課題を探り出してみた。問題点は山積みだが、一つ一つ手をつけて改善を図りたい。また、今回は教育実習、施設実習が中心となったが、一つ一つの実習を丁寧にみていけばそれぞれに指導上の課題が浮かび上がってくることは間違いない。例えば、卒業直前の段階で印象に残っている実習としてあげる学生はほとんどいないが、学生生活最初の実習である保育実習Ⅰ（保育所）の事前指導についてもたくさんの課題を抱えていると実感している。

2年間のうちに合計5回、総計で約11週間の学外実習が用意されているというのは、学生にとって大変なボリュームである。本学の実習計画の流れの全体像をふまえて、それぞれの実習が段階的、有機的に結びつき保育者としての力量を身につけられるような実習指導を模索しなければならない。

謝辞：本研究は学生の率直かつ真摯なコメントによって成り立っている。コメントにご協力いただいた平成19・20年度幼児保育学科2年生に感謝いたします。

引用文献

小倉 毅・大橋美佐子・小野順子, 保育実習Ⅰ（施設）の現状と課題, 全国保育士養成協議会第48回研究大会発表論文集, 2009, 78-79.

厚生労働省HP, <http://www.mhlm.go.jp/>

ト田真一郎・植田 明, 本学学生 of 幼稚園教育実習に対する意識（第1報）—実習に対する不安と期待を中心に—, 常磐会短期大学紀要, 2007, 31, 15-25.

社団法人全国保育士養成協議会専門委員会編, 保育実習指導のミニムスタンダード, 2005, 社団法人保育士養成協議会.

高橋裕子, 幼稚園教育実習, 阿部明子編, 教育・保育実習総論〈第2版〉, 2000, 東京, 萌文書林, 16-49.

田中チカ子, 施設での実習内容, 森上史朗・大豆生田啓友編, 幼稚園実習 保育所・施設実習, 2004, 京都, ミネルヴァ書房, 135-177.

中津愛子・神林ノブ子・松田幸恵, 保育実習の事前指導における保育所見学実習, 保育士養成研究, 2007, 25, 19-25.

二階堂邦子, 実習とは, 二階堂邦子編, 教育・保育・施設実習テキスト, 2009, 東京, 建帛社, 1-16.

長谷範子, 保育士養成における施設実習指導の工夫, 全国保育士養成協議会第44回大会研究発表論文集, 2005, 150-151.

原陽一郎, 保育所以外の児童福祉施設の実習「施設実習」に向けて, 二階堂邦子編, 教育・保育・施設実習テキスト, 2009, 東京, 建帛社, 29-44.

三溝千景・松寄洋子, 保育士養成における保育所実習と教育実習の連携—テーマ設定と保育経験の積み上げ—, 保育士養成研究, 2002, 20, 55-68.

村松十和, 施設実習の前から実習終了時点の学生の気持ちや学び, 全国保育士養成協議会第48回研究大会研究発表論文集, 2009, 68-69.

森山禎也・宮崎正則・佐竹要平・吉田美恵子・松本千尋, 保育実習における事前事後指導の展開, 全国保育士養成協議会第46回研究大会研究発表論文集, 2007, 74-75.